
シカナル計画

瞬牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シカナル計画

【Nコード】

N3379BA

【作者名】

瞬牙

【あらすじ】

私のもうひとつのサイトにも載せましたが、こちらにも。

ナルト↓↑シカマルで、語り役は各話かわります。

ナルトが毎日シカマルに告白するところからお話が始まり、ナルト総受け。

アカデミーに部活動なんてないし夏休みとかあるの？

みたいな突っ込みはご容赦を。

毎日の告白

「シカマルー！！！！大好きだってばよ！！！」

「うぜえ。」

本日最初の告白。

さて、今日は何回言われるのだろうか。

アカデミーに入学してからよくつんでいるナルトとシカマル。

ナルトが、最近女らしい。

男だが、整った顔立ちにやわらかそうな蜂蜜色の髪の毛、すべてを吸い込んでしまいうような空の色をした瞳。九尾の力で、傷一つない真っ白なモチモチの肌。

一緒につるんでいる身としては心臓にも体（主に下半身に）悪い。

アカデミー生とはいえ、もうすぐ卒業わけで、色任務のための授業だってある。

それには対男色家の知識だってあるわけで。

キバはいつも、悶々としていた。

「なあ、シカマル。」

さっさとこの状態を終わらせたいキバは、シカマルに尋ねた。
ナルトに興味はあるのか、と。

「ナルトに興味？恋愛感情の話か？さあ、どうだろうな。」

シカマルは含みのある笑いをしながら去っていった。

「体に悪いんだっつーの、さっさとくっつけバカヤロー。」

実際どうだろうな。といいながら、この二人はドベ2のくせに組むとどんな任務、演習でも達成率100%という最強コンビなのだ。

「ああ、めんどくせー」

俺はヘナヘナとそこに座り込んだ。

「どうしたんだってば？ シカマルの口癖何て言って。キバラしくな
いってば。」

「ああ、ちょっとな…」

ふと、ある作戦が頭の中を通過した。

「これだ!!」

ガバツと体を起こした俺に驚いたナルトは固まったまま動かない。

「いいこと教えてやる！」

「いいこと…？ 嫌な予感しかないってばよ…」

ナルトはあからさまにいやそうな顔をした。

「シカマルのことでもか？」

俺はニヤリと笑っていった。

「はやくいえってばよ!!」

思ったとおりの反応で次は苦笑がもれた。

「はいはい、あんな？ ゴニョゴニョゴニョ…」

俺は思い付いた作戦をナルトに話した。

「な。簡単だろ？」

「簡単だろ？ じゃないってばよ!! そんな恥ずかしいこと出来る訳
無いってばよ!!」

「毎日告白してるやつがよくいうぜ。」

「それは…その…」

まだもじもじしている。

「やんの？ やんねーの？」

「…やる」

そして、ナルトは行動を開始した。

放課後、教室で俺はぐーたらしていた。正しく言うと、イノをまっ
ていた。

「シカマル！ ちょっといいってば…？」

ナルトが珍しくおとなしく声をかけてきた。

「んだよ。」

ナルトは俺が好きらしい。

ぶっちゃけ俺も好きだ。

だけでも、あんだけはつきり言われたら男として微妙だ。

し、感情を表すのが自覚できるほど下手な俺は、いつも毒をはいてしまう。

「なあ、シカマル。俺、やっぱりシカマルが好きなんだってばよ。

シカマルは俺のこと嫌いなのか？」

放課後、夕日を浴びて上目遣いで俺を見上げるナルトは、

正直、ヤバイ。

「シカマル…？」

なかなか返事をしない俺にナルトは驚きの行動を仕掛けてきた。服の胸の辺りを掴み、涙目で見上げてきた。

「ナルト…」

そのナルトをみたら、自然と言葉が溢れ出してきた。

「俺も…その、好きだよ。ナルトが。」

「シカマル!!」

ナルトは俺に抱き着いた。

それを受け止めながら誓った。

この小さな子を護っていこうと、里のやつらや、上層部のやつら、ナルトに害なすものすべてから。

「大好きだってばよ。」

「俺も大好きだ。一番愛してる。」

後日。

「キバあー!!!!」

「どうしたナルト？」

「えっへへー」

ナルトはシカマルと腕を組ながらぶいっといわんばかりにブイサインをして、こぼれんばかりの笑顔をみせた。

キバは、これでナルトも落ち着いて、心臓も体も休まるだろうとおもった。

しかし、次は、男の色香がでてきたシカマルと、女みたいな色香がでてより一層かわいらしくなったナルトに、アカデミーの生徒（と、一部教師）は悩まされることになったとき。

ちなみにシカマルはあのあとイノに怒られなかった。

イノはキバに頼まれた、仕掛人の一人だったから。

毎日の告白（後書き）

今回の語り役はキバでした^^

次回の語り役は春野サクラさんです！

努力は報われる…？

「シカマルー！！大好きだってばよ！！」

半ば朝の挨拶化したナルトのシカマルへの告白。
変わったことといえば、

「ん。俺も好きだぜ、ナル。」

シカマルがナルトに返事をするようになり、とろけるような極上の
笑顔を見せるようになったこと。

そりゃファンクラブだってできるわよね。

そのせいか、売上は右肩上がり。ありがとう二人とも！

「またやってるわよあいつら！サクラ、ヒナタ、ネタのチャンスよ
！」

あ、そうそう申し遅れましたが、わたくし、今回の語り役の春野サ
クラです。文学部所属の部長よ！同人誌だしてるの。

「サクラちゃん…？はやくいかないとネタが…」

ネタっていうのはね…ま、後で話すわ、

「それよりネタよ！！」

「「どれより…？」」

「いつかわかるわ。」

貴女たちにも回ってくるでしょうし。↑はい、まわします。

「で、今日はどんな感じ？」

「そうね、最近代わり映えしないけど、抱き着いて、頭撫でられて、
ね。」

「ちっ、ネタに使えないじゃない。発売日は2週間後だっていうの
に。」

「そうだね…印刷のことも考えたら10日以内には原稿完成したい
ね。」

「校閲もしないといけないし…どうしましょうか…」

「おまえたち、大切なことを忘れてはいないかい？」

「綱手先生!!」

綱手先生は文学部の顧問なのよ。

綱手先生は言葉を続けた。

「夏休みには、運動部と、文化部の交流を深めるために、合同合宿がある。それを使えばいいじゃないか。」

ナルトはサッカー部、シカマルは幽霊部員だが文学部だ。各部の部長の許可が下りれば成立。

サッカー部の部長はキバ。

キバも私たちの本の定期購読者だし、サッカー部にはシカマルのファンが多い。

許可は下りるだろう。

「綱手先生天才!」

「そうよ、使えるわ! 運がよければナマが見られるかも!!」

「そ、そうだね…」

(ナルト君のナマ：／／／)

「なら、早速よ! 申請用紙もらってこなくちゃ!」

「ほれ。これじゃろ。」

「校長!? いつの間に?」

「ほっほっほ。」

そして、私達の、

シカナル計画は発動した。

努力は報われる…？（後書き）

ということで、今回の語り役はサクラでした。
次のお話は

次回は…日向ヒナタさん？

報われない努力は努力じゃないのよ！

えっと、日向ヒナタです。

サクラちゃんに言われてナレーター？をやることになりました。
今回はお願いします。

で、現在の状況はサッカー部の部室の前にあります。

なんで？もちろんナルト君のプレーを見るため！じゃなくて、
相互合宿のためです。

で、今はサクラちゃんとキバ君が交渉^{バトル}中。

合宿の開催自体は簡単に決まったのだけれど、それからの交渉が…

キバ君の言い分

- ・ナルトはウチの部員だからサッカー部と寝るべきだ
- ・シカマルは男だからサッカー部と寝たほうがいい

サクラちゃんの言い分

- ・シカマルは男だけど問題はない
- ・ナルトのほうが危ないから文芸部のところで一緒に寝るべき

裏キバ君の言い分

- ・ナルトとシカマルを一緒にしたら面白いものがみれるからいいじゃないか
- ・その代わりにいい顧客しようかいする

裏サクラちゃんの言い分

- ・文芸部がいい物を見られたら小説として発行するからナルトをよこせ

- ・サッカー部の顧客はもう大体掌握してるから無意味よ

・サッカー部にナルトをおいておいたら何されるかわかったものじゃない

ということ。ナルト君たちがどっちで寝るか。

「考えても見ろよ。シカマルだってオトコだぜ？いつヒナタの可愛い寝顔にこうグツときちまうかわかんねえだろ？」

「考えるのはあんたよ。シカマルはナルトを傷つけるようなことしないわ。」

イノちゃんがぼっそり。それに、私の寝顔は可愛くないし：

「おまえなあ、男っていうのはいつ狼になるか：」

「うっさい。狼にもなれない万年発情期の駄犬が。」

サクラちゃんがさらにぼっそり。

「駄犬ってお前！」

「じゃあねえだろ。お前犬なんだし。」

シカマル副部長が重ねがけでぼっそり。これ、拷問に使えるレベルだよ：

「サッカー部の顧客だってまだほかにもいるかもしれないし！」

「キバ君：もうサッカー部のみんなは文芸部のお客さんだよ。」

「きやはは！ヒナタにまできられてるじゃない！」

あ、私がみんなって言ったから、シカマル副部長が勘違いして睨んできてるよお。怖い。

「あ、ナルトは違うわよ。」

サクラちゃんナイスフォロー！怖いですシカマル副部長：

で、みんなのぼっそりとシカマル副部長の睨みとサッカー部のナルト副部長のウルウル上目遣い（天然）により文芸部でナルト君は寝ることになりました。

「しゃーんなろー！女なめるんじゃないわよ！」

ああ、サクラちゃんなんて男ら、漢らしいの！今度はサクラちゃん

で書いてみようかなあ。

話がそれてしまいました：

「部長！ひどいっすよ！任せておけっていったのに！」

「すまん、部員A君。俺は努力はしたんだ：しかし、及ばなかった。」

「努力は必ず報われるものよ。報われなければそれは努力とはいわないのよ！」

イノちゃんがビシッと指を突きつける。

「くそお！おぼえてろよお！」

サッカー部の部員さんたちは灰と化したキバ君を連れて悪役のよう
なせりふを言って去っていった。

サクラちゃんとイノちゃんが高笑いしてるからこっちのほうがよっ
ぽど悪役みたいだよ：

「で、ヒナタ。シカマル。」

「へ、ふえ！？」

「あんだよ。」

「あなたたちはノートパソコンとか充電しておいてね？」

「あ、うん。わかったよ！」

「は？めんどくせえ。」

そうだった。この中でまともに機材を扱えるのは私とシカマル副部
長だけでした：

「シカマル。今回の合宿はあなたとナルトを二人きりにしてあげる
けど？」

イノちゃんが不敵にニヤリと笑う。

「のった。」

流石イノちゃん。幼馴染の扱いを心得てる。

「じゃあ、いこうぜ、ヒナタ。」

「あ、はい。」

私たちは部室へ向かった。

報われない努力は努力じゃないのよ！（後書き）

というわけで今回の語り役は【日向ヒナタ】でした！！

ヒナタ様の口調がわからぬ…

難しかった。けどキバ君がやられていくのは面白かった！！

まあ、次は我が（いや、ナルトのだけど）愛しの【奈良シカマル】です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3379ba/>

シカナル計画

2012年1月12日19時49分発行